

欲望する諸機械の中で生きる子ども

— ドゥルーズ＝ガタリ『アンチ・オイディプス』を手がかりとして —

森 田 裕 之

L'enfant qui vit parmi les machines désirantes

— Deleuze-Guattari *L'Anti-Œdipe* —

MORITA Hiroyuki

第1章 欲望する生産

ドゥルーズ (G. Deleuze 1925-1995) とガタリ (F. Guattari 1930-1992) が共同で行った最大の仕事は、『アンチ・オイディプス』(1972年)と『千のプラトー』(1980年)という二つの著作である。『千のプラトー』は、『アンチ・オイディプス』の続編にあたり、これらの二つの著作は全体として、「資本主義と分裂症」を構成している。

われわれは、この論文において、『アンチ・オイディプス』に焦点を絞り、考察を行いたい。というのもわれわれは、『アンチ・オイディプス』が、ドゥルーズ＝ガタリの著作の中で最も重要な著作であり、また『アンチ・オイディプス』の中で展開された思想が、ドゥルーズ＝ガタリの思想の中心をなしていると考えからである。

この論文で取り上げる『アンチ・オイディプス』の最大の主張の一つは、次のようなことである。精神分析は、無意識というものを、父-母-子どもというオイディプス三角形の中に閉じ込め、窒息させている。精神分析は、無意識を、神話や悲劇や夢の中で表現される無意識として捉えている。それに対してドゥルーズ＝ガタリは、このような精神分析の無意識の捉え方を批判する。彼らは、無意識を卑小なオイディプス三角形から解き放ち、無意識を生産する無意識として捉えることを提案するのである。ドゥルーズ＝ガタリは、表現される無意識の代わりに生産する無意識を提起する。そしてこの生産する無意識が、「欲望する生産」(production désirante)といわれるのである¹⁾。

このようにドゥルーズ＝ガタリは、欲望する生産という概念を提起している。この欲望する生産という概念は、4章から成る『アンチ・オイディプス』の第1章および第2章の中で提起された概念である。しかし欲望する生産は、『アンチ・オイディプス』の全体における基本的で中心的な概念となっている。欲望する生産は、「生産の生産」(production de production), 「登録の生産」(production d'enregistrement), 「消費の生産」(production de consommation)

という三つの生産によって構成されている。欲望する生産においては、登録や消費すらもが、生産として扱われるのである。ここでは、一切は生産なのである²⁾。

またこのような欲望する生産という概念は、子どもの在り方を捉える有効な視点となる。結論を先取りして言えば、欲望する生産から捉えられる子どもの在り方は、次のようになる。子どもは、口、胃、腸、肛門といった身体の諸部分に分解され、それらの諸部分は、一人の人物として構成されることなく、ばらばらに存在し、相互に接続している。たとえば口と胃が接続している。またそれらの身体の諸部分の周りには、揺りかご、母の乳房、おしゃぶり、排泄物、おもちゃの汽車や自動車といった諸部分が存在し、身体の諸部分と接続している。たとえば母の乳房と口が接続している。欲望する生産から捉えられる子どもの在り方は、このような自由で多様な諸々の接続という在り方である。これらの接続においては、子どもという統一された人物は存在せず、ばらばらで多様な諸部分しか存在しないのだ。

そこでこの論文ではまず、『アンチ・オイディプス』の前半部で提起された欲望する生産の概念を、ドゥルーズ＝ガタリに忠実に説明する。すなわち『アンチ・オイディプス』の第1章および第2章の内容に則りつつ、欲望する生産を構成する生産の生産、登録の生産、消費の生産を順次、説明していく。その上でわれわれは、欲望する生産の視点から、子どもがどのように捉えられるのかを考察する。先に述べたように、ドゥルーズ＝ガタリは、精神分析を批判の対象にしている。そこで精神分析の視点から捉えられる子どもの在り方と比較しつつ、ドゥルーズ＝ガタリの欲望する生産の視点から捉えられる子どもの在り方を明らかにする。

第2章 生産の生産

先に述べたように、欲望する生産は、生産の生産、登録の生産、消費の生産によって構成されている。そこでまず、生産の生産についての説明から始めよう。

生産の生産を理解するために、次のような場面を思い浮べてみよう。まだ産まれたばかりの子どもの口は、母の乳房に食いつき、そこからミルクを摂取している。子どもの口や母の乳房は、器官であり、いわゆる「部分対象」(objet partiel)である。ドゥルーズ＝ガタリは、このような器官のことを欲望する機械と呼んでいる。口が乳房につながるように、ある器官は、別の器官とつながる。器官は、常に複数である。したがってドゥルーズ＝ガタリも言うように、欲望する機械は、単数としては存在できない。欲望する機械は、常に「欲望する諸機械」(machines désirantes)という複数形で存在しているのである。欲望する諸機械は、乳房と口のように、「これとあれ」(et, et puis)という接続的な形態をもった二項機械である。このような欲望する諸機械の別の例を挙げれば、口と胃、胃と腸、腸と肛門である³⁾。

さらに欲望する諸機械は、身体の諸器官ばかりではない。ドゥルーズ＝ガタリは、次のように述べる。「人間は、万物の王としての人間ではない。むしろ人間は、あらゆる形態、あらゆる種類の深い生命とつながり、星や動物とさえかわる。人間は、……樹木を自分の身体に、乳房を口に、太陽を尻に接続することをやめない」⁴⁾。星や動物ばかりでなく、石や金属や水や草木などもそれぞれ、単数の欲望する機械である。自然の要素は、単数の欲望する機械である。

この単数の欲望する機械が、人間の身体の器官、つまりやはり単数の欲望する機械につながるのだ。乳房と口がつながるのと同じ資格で、樹木と身体、太陽と尻がつながる。人間の身体の器官としての単数の機械は、自然の要素としての単数の機械とつながっているのである。二つの機械が接続する欲望する諸機械の次元では、人間と自然との間の区別は存在しない。人間と自然とは、相対する二項ではなく、相互につながっている。欲望する諸機械の次元とは、人間と自然とが区別される以前の次元なのである⁶⁾。

欲望する諸機械の働きを考察するために、再び母の乳房と子どもの口との二項関係を見てみよう。ドゥルーズ＝ガタリによれば、母の乳房は、ミルクの流れを生産する。その乳房に接続された子どもの口は、生産されたミルクの流れを「切断－採取」(coupure-prélèvement)する。このように欲望する諸機械の最初の機械が、流れを生産し、その最初の機械に接続された第二の機械が、その流れを切断－採取する。さらに口は胃とも接続する。口と胃との二項関係においては、口が流れを生産し、胃がその流れを切断－採取している。つまり今度は、先の第二の機械が、流れを生産し、その機械に接続されたさらに別の機械が、その流れを切断－採取している。このように二項関係は、線形状に伸びていき、それぞれの機械は、一方の二項関係では流れの切断－採取を行い、他方の二項関係では流れの生産を行っているのである⁶⁾。

また欲望する諸機械においては、欲望が機械として捉えられている。ドゥルーズ＝ガタリによれば、従来、欲望というのは、実在的な対象の欠如として考えられていた。さらに、欲望を欠如として捉える、こうした欲望の古典的な考え方は、欲望を幻想的な対象の生産として捉える考え方にも深められた。欲望によって生産された幻想的な対象は、欠如している実在的な対象を埋め合わせ、その代役をつとめるというわけである。しかしドゥルーズ＝ガタリは、このような欲望の従来の考え方を退ける。彼らは、欲望を機械として定義することを提案しているのである。「欲望は機械であり、欲望の対象もまた、接続された機械である」⁷⁾。したがって欲望は、機械として、流れという実在的なものを生産する。欲望は、決して幻想的な対象を生産せず、実在的なものを生産するのである。このような欲望イコール機械という考え方にドゥルーズ＝ガタリの独創の一つがある。

このような欲望する諸機械の接続的な形態が、生産の生産である。生産の生産は、欲望する諸機械を「これとあれ」という仕方でも接続するので、「接続的総合」(synthèse connective)ともいわれるのである⁸⁾。

第3章 器官なき身体

ドゥルーズ＝ガタリによれば、二項機械としての欲望する諸機械が現れると、次に欲望する諸機械とは別の第三項が形成される。その第三項は、「器官なき身体」(corps sans organes)と呼ばれている⁹⁾。器官なき身体は、先に述べた生産の生産とこれから述べる登録の生産とを橋渡しする概念である。そればかりではなく、器官なき身体は、欲望する生産にとって、なくてはならない重要な概念である。そこで登録の生産を説明する前に、器官なき身体について説明してみよう。

欲望する諸機械と器官なき身体との関係を把握するために、次のような例を考えてみよう。分節化され、発音された語、つまり区別された諸々の音素の接続があるとすると。すると他方には、全く分節化されていない息や叫びというものが存在する。分節化され、発音された語があれば、その語には、分節化されていない、未分化な息や叫びが常に寄り添っている。

ドゥルーズ＝ガタリによれば、分節化され、発音された語と分節化されていない息や叫びとの関係はそのまま、欲望する諸機械と器官なき身体との関係に対応している。すなわち欲望する諸機械は、分節化され、発音された語に対応している。それに対して器官なき身体は、分節化されていない息や叫びに対応している¹⁰⁾。欲望する諸機械とは、分節化され、区別された諸々の器官の接続的な体制であり、それに対して器官なき身体とは、分節化されない、「未分化な巨大対象」(enorme objet non différencié)である¹¹⁾。分節化されていない息や叫びは、分節化され、発音された語の隣に第三項として形成される。それと同様に器官なき身体は、欲望する諸機械の隣に第三項として形成される。欲望する諸機械があれば、器官なき身体は、それらの諸機械に寄り添うように存在するのだ。

このように器官なき身体は、未分化の対象によってのみ構成されている。したがって器官なき身体は、分節化され、区別された諸器官をもっていない。器官なき身体には、口も胃も腸も肛門もない。つまりそれは、非有機体的な塊である。したがって器官なき身体は、「非生産的なもの」(l'improductif), 「不毛なもの」(le stérile), 「生み出されないもの」(l'inengendré), 「消費し得ないもの」(l'inconsommable)である¹²⁾。

また器官なき身体は、一つの全体である。しかし器官なき身体は、欲望する諸機械をパズルの諸断片のように組み合わせることによって、構成された全体ではない。それは、諸部分としての欲望する諸機械を統一化し、全体化する全体ではない。そうではなくて、ドゥルーズ＝ガタリによれば、器官なき身体は、諸部分としての欲望する諸機械を統一化したり、全体化したりはしない全体であり、諸部分の傍らにある全体なのである。器官なき身体は、諸部分がそこから発生する起源となる全体でも、諸部分から派生する結果としての全体でもない。そうではなくて、器官なき身体は、諸部分の傍らにある部分のような全体なのである¹³⁾。

このように器官なき身体は、欲望する諸機械の傍らにある未分化で、非有機体的な対象である。この器官なき身体が、次に述べる登録の生産に対して重要な役割を演じることになる。

第4章 登録の生産

次に登録の生産についての説明をしよう。

前章の器官なき身体についての説明から分かるように、一方には接続的形態の欲望する諸機械があり、他方には器官なき身体がある。そしてドゥルーズ＝ガタリによれば、欲望する諸機械が、器官なき身体に侵入すると、器官なき身体は、諸器官としての欲望する諸機械を備えた有機体となってしまう。器官なき身体は、そのように有機体化されることに耐えられない。器官なき身体は、諸器官を必要としない。したがって器官なき身体は、欲望する諸機械に対して反発し、それらの諸機械を外に追い出す。器官なき身体は、欲望する諸機械による侵入に対し

て反発で応えるのである。このようにして欲望する諸機械と器官なき身体との間には相互作用が生じる。すなわち欲望する諸機械が器官なき身体へ侵入する作用と、器官なき身体が欲望する諸機械に対して反発する反作用とが生じる。ドゥルーズ＝ガタリにおいては、この反発、つまり器官なき身体による欲望する諸機械に対する反発こそが、根源的な抑圧なのである¹⁴⁾。

しかしドゥルーズ＝ガタリによれば、このような反発の後に、器官なき身体は、欲望する諸機械の上に折り重なり、それらの諸機械を引きつけ、わが物とする。こうして欲望する諸機械は、器官なき身体の上に付着し、登録されることになる。吸引が反発に取って代わったのである。そして器官なき身体は、欲望する諸機械の登録表面となり、欲望する諸機械の土台となる¹⁵⁾。

器官なき身体の上に登録された欲望する諸機械の在り方は、先に述べた欲望する諸機械の在り方、すなわち二つの機械が「これとあれ」という仕方で結ばれた接続的形態とは異なっている。ドゥルーズ＝ガタリによれば、欲望する諸機械の器官なき身体への登録は、「これであれ……あれであれ」(soit…soit)という仕方でなされるのである。つまり、「これとあれ」という仕方によって接続された二つの機械は、器官なき身体の上に距離を置いて離されて登録されることになる。「これとあれ」という接続的形態が、「これであれ……あれであれ」という離接的形態に取って代わったのである¹⁶⁾。

「これであれ……あれであれ」という登録の仕方は、「これか……あれか」(ou bien)という登録の仕方とは異なっている。ドゥルーズとガタリによれば、「これか……あれか」は、他によって一を制限し、一から他を排除する在り方である。すなわち「これか……あれか」は、排他的一的、制限的、否定的である。それに対して「これであれ……あれであれ」は、離接した諸項を、その間にある距離を越えて肯定する在り方であり、他によって一を制限することもなく、一から他を排除することもない在り方である。すなわち「これであれ……あれであれ」は、「これか……あれか」とは逆に包含的、無制限的、肯定的なのである¹⁷⁾。

以上のように欲望する諸機械は、「これであれ……あれであれ」という仕方で器官なき身体の上に登録され、器官なき身体は、この登録の表面として役立つことになる。ドゥルーズ＝ガタリによると、その登録の結果として、欲望する諸機械は、器官なき身体から発出するように見える。実際には器官なき身体は、欲望する諸機械の後に、それらの諸機械の傍らに第三項として形成された。しかし欲望する諸機械の登録の領域では、外見上、器官なき身体が先で、そこから欲望する諸機械が発出するように見える。器官なき身体と欲望する諸機械の関係は、反転して見えるのだ¹⁸⁾。

またドゥルーズ＝ガタリによれば、「これであれ……あれであれ」という仕方で離接的に登録された二つの機械のそれぞれを非シニフィアンの記号と考えると、二つの機械の全体は、一つのシニフィアンを構成していると考えられる。たとえば母の乳房と子どもの口について考えてみよう。乳房と口は、器官なき身体の上に離接的に登録される。離接的に登録された乳房と口のそれぞれは、非シニフィアンの記号である。離接的関係にある乳房と口の全体は、一つのシニフィアンである。このように器官なき身体の上に離接的に登録された二つの機械の全体を一つのシニフィアンと考えると、ある二項機械としての欲望する諸機械は、離接的に登録されて一つのシニフィアンとなり、別の二項機械としての欲望する諸機械も同様に、離接的に登録さ

れて別のシニフィアンとなる。こうして登録表面である器官なき身体の上には、いくつものシニフィアンが存在することになり、その全体は、それらのシニフィアンによって構成されたコードということになる。したがって「これとあれ」という形で接続された欲望する諸機械は、「これであれ……あれであれ」という形でコードとして登録されるのだ¹⁹⁾。

次に切断について考えてみよう。欲望する諸機械の接続的形態においては、切断は切断－採取であった。すなわち子どもの口が、母の乳房によって生産されたミルクの流れを切断－採取するという在り方であった。では「これであれ……あれであれ」という離接的形態においては、切断はどのような在り方をするのだろうか。再び、母の乳房と子どもの口という二項機械について考えてみよう。始めは乳房と口は、「これとあれ」という仕方で接続され、口の中は、切断－採取したミルクの流れに満ちている。そのような乳房と口はやがて、器官なき身体によって吸引され、その上に距離を隔てて登録される。口の中の切断－採取されたミルクの流れは、口と胃とが接続されていれば、胃へと流れていくことができる。しかし口と胃の二項機械も、乳房と口の二項機械と同様に離接的に登録される。したがって口の中のミルクの流れは、胃へと流れ出すことができずに、ストックされることになる。ドゥルーズ＝ガタリによれば、そのミルクのストックは、固定されていず、可動的である。乳房と口の離接的關係、すなわち乳房と口によって構成されたシニフィアンから、ミルクのストックを取り外し、「切断－離脱」(coupure-détachement)させることができる。このように接続的關係において切断－採取された流れが、離接的關係においては、切断－離脱したストックになるのである²⁰⁾。

最後にシニフィアンの性質について考えてみよう。シニフィアンは、離接的に登録された二つの機械の全体によって構成されている。シニフィアンを構成する二つの機械は、「これであれ……あれであれ」という仕方で登録されているので、シニフィアンは、線形的ではないということになる。また先に述べたように、乳房と口が登録されると、口によって切断－採取されていたミルクの流れはストックになる。そのミルクのストックを、乳房と口によって構成されたシニフィアンに対するシニフィエと考えてみよう。ミルクのストックのシニフィエは、可動的で、シニフィアンから取り外され、切断－離脱させられる。シニフィアンは、シニフィエなきシニフィアンとなる。このシニフィアンは、シニフィアンとシニフィエとが対応する一対一対応ではない。そうではなくてシニフィアンは、対応するシニフィエをもたないだけ多義的になる。こうしてドゥルーズ＝ガタリも言うように、シニフィアンは、非線形的、多義的という性質を備えることになる²¹⁾。したがってこのシニフィアンは、一般的に考えられたシニフィアン、つまり線形的で、一対一対応的なシニフィアンとは著しく異なっている。また多数の非線形的で、多義的なシニフィアンによって構成されたコードも、自ずから言語のコードと異なっている。ドゥルーズ＝ガタリは、このコードについて次のように表現している。「コードは、言語活動よりも開かれた多義的な形成体である隠語に似ている」²²⁾。

このように欲望する諸機械は、コードとして器官なき身体の上に登録される。この欲望する諸機械の登録が、登録の生産である。欲望する諸機械の登録は、「これであれ……あれであれ」という仕方で離接的に登録されるので、登録の生産は、離接的総合 (synthèse disjonctive) ともいわれるのである²³⁾。

第5章 消費の生産

登録の生産の後に続く消費の生産についての説明をしよう。

ドゥルーズ＝ガタリは、器官なき身体の上に離接的に登録された欲望する諸機械を、諸々の「強度」(intensité)として捉え直す。すなわち器官なき身体の上に登録されたある一つの欲望する機械は、ある一つの強度であり、別の一つの欲望する機械は、別の一つの強度である。こうして、器官なき身体の上に離接的に登録された欲望する諸機械は全体として、一連の諸強度になる²⁴⁾。

では強度とは何であろうか。父、母、子どもといった人物は、外延的なものである。強度とは、この外延という概念に対立する概念である。すなわち強度は、非外延的、内包的なものである。強度は、外延的な人物ではなく、非外延的で、内包的な乳房や口といった欲望する機械を示している。したがって諸強度は、非外延的、内包的な諸部分としての欲望する諸機械である。

またドゥルーズ＝ガタリによれば、器官なき身体の上の一連の諸強度は、円環を形づくる。その円環が収斂する中心は、接続的形態の欲望する諸機械である。先に述べたように、器官なき身体は、接続的形態の欲望する諸機械に対して反発し、それを抑圧していた。しかしこの抑圧されたものとしての欲望する諸機械は、「抑圧されたものの回帰」(retour du refoulé)として、円環の中心に回帰してくるのである²⁵⁾。

こうして器官なき身体の上には、回帰した欲望する諸機械を中心とした諸強度の円環が形成されることになる。この場合、器官なき身体は、強度の母胎、強度の土台である。したがってドゥルーズ＝ガタリは、器官なき身体を強度＝0としている。あらゆる強度は、強度＝0である器官なき身体を起点にすることになる²⁶⁾。

ドゥルーズ＝ガタリによれば、このような強度の一つ一つから主体が生れてくることになる。ある強度から主体が生れ、その次の強度から主体が再び生れ変わる。一連の諸強度の円環を辿っていくにつれて、その都度、強度から主体が生れ、次々に主体が生まれ変わっていくのだ²⁷⁾。

ドゥルーズ＝ガタリは、元ドレスデン控訴院議長のシュレーバー (D. P. Schreber 1842-1911)の妄想について次のように考える。シュレーバーは、「私には相次いで『ヒュペルボレリン』、『オセックのイエズス会徒』、『クラッタウの市長』、『無敵のフランス将校に対してその誇りを守るべきアルザスの少女』、最後に『モンゴルの王』の役割が与えられるよう決められていた」²⁸⁾と妄想する。しかしここに登場する「ヒュペルボレリン」、「オセックのイエズス会徒」、「クラッタウの市長」、「アルザスの少女」、「モンゴルの王」という呼び名はそれぞれ、外延的な人物を指示しているのではなく、非外延的、内包的な強度を指示している。呼び名は通常、外延的な人物を指示する。しかし諸強度の領域においては、呼び名は、もはや人物を指示するのではなく、強度を指示することになる²⁹⁾。そしてシュレーバーの主体は、「ヒュペルボレリン」という呼び名が指示する強度から生れ、次に「オセックのイエズス会徒」という呼び名が指示する強度から生まれ変わり、という具合に呼び名が指示する諸強度から次々に生れてくる。主体によって生きられる強度の方が、その強度を生きる主体に対して先行するのである³⁰⁾。また一連の諸

強度の円環を辿っていくにつれて、主体は、次々と生れ変わるので、この主体は、自己同一性を欠いた主体なのである³¹⁾。

さらにドゥルーズ＝ガタリによれば、この主体は、自分が生れてくる強度を消費する³²⁾。再びシュレーバーの例を取り上げよう。シュレーバーにおいては、「ヒュペルボレリン」という呼び名は、非外延的、内包的な強度を指示している。この強度から、シュレーバーの主体は生れる。そしてシュレーバーの主体は、自身が生れてきた強度、すなわち「ヒュペルボレリン」という呼び名が指示する強度を消費する。さらにシュレーバーの主体は、「オセックのイエズス会徒」という呼び名が指示する強度から再び生れ、その強度を消費するのである。このようにシュレーバーの主体は、自分が生れてきた諸強度を次々に消費する。またシュレーバーの主体は、そのような強度の消費によって快感を感じる。シュレーバーは次のように言う。「神に永続的な享楽を与えることは、私の任務である。その際に、いくらかの感覚的享楽が私に得るにせよ、何年間にもわたって私に課せられてきた余りにも極端な苦悩と難儀に対してのささやかな埋め合わせとして、それを受けとめることは私の正当なる権利である」³³⁾。

ドゥルーズ＝ガタリは、以上のような主体の在り方、すなわちその都度、強度から生れ、その強度を消費する主体の在り方を、「だから、それは私である。だから、それは私のものである……」(C'est donc moi, c'est donc à moi…)と定式化している³⁴⁾。

次に切断について考えてみよう。生産の生産においては、切断は切断－採取であり、登録の生産においては、切断は切断－離脱であった。では主体が生み出される領域においては、切断はどうなるのだろうか。抑圧されたものの回帰としての欲望する諸機械は、一連の諸強度が形成する円環の中心に位置していた。主体が中心にあるのではない。中心にあるのは欲望する諸機械である。主体は、その都度、強度から生れるのであるから、諸強度の円環の円周に位置しているのである。したがってドゥルーズ＝ガタリが言うように、主体は、円環の中心を占める欲望する諸機械の傍らにある残りもの、つまり欲望する諸機械の付属物、あるいは欲望する諸機械に隣接した部品である。主体は、「切断－残余あるいは残りもの」(coupure-reste ou résidu)という在り方をしている。この切断－残余あるいは残りものが、生産の生産の切断である切断－採取、登録の生産の切断である切断－離脱に続く第三の切断ということになる³⁵⁾。

ドゥルーズ＝ガタリは、『アンチ・オイディプス』の冒頭で次のように書いている。「それは、いたるところで作動している。ある時は止まることなく、ある時は断続的に作動している。それは呼吸し、それは熱くなり、それは食べる。それは大便をし、それは異性と交わる。……いたるところで、それらは諸機械である。決して隠喩的に諸機械であるというのではない。それらは、互いに連結し、接続する機械の機械である」³⁶⁾。欲望する諸機械は、乳房と口といった接続した諸器官を意味するあれこれの「それ」(ça), 複数のそれである。主体である私が、あれこれのそれを従えているのではない。事態は全く逆である。すなわちあれこれのそれの方が、主体である私を従属させているのだ。私は、あれこれのそのの付録に過ぎない。

以上のような、強度から誕生する主体の消費が、消費の生産である。主体は、「だから、それは私である。だから、それは私のものである……」という在り方を示すので、消費の生産は、連想的総合(synthèse conjonctive)ともいわれるのである³⁷⁾。

第6章 欲望する生産から見た子ども

以上に述べたドゥルーズ＝ガタリが提起する欲望する生産の概念を簡単に要約してみよう。

まず最初は生産の生産である。それは接続的総合とも言い換えられる。生産の生産は、欲望する諸機械を「これとあれ」という仕方で接続し、流れを生産する総合である。その諸機械の生産においては、切断は切断－採取として現れる。

器官なき身体は、欲望する諸機械の接続的形態と対になって現れる。器官なき身体は、未分化な巨大対象、非有機体的な塊、欲望する諸機械の傍らにある全体として規定される。

次に登録の生産である。それは離接的総合とも言い換えられる。登録の生産は、欲望する諸機械を器官なき身体の上に「これであれ……あれであれ」という仕方登録する総合である。その諸機械の登録においては、切断は切断－離脱として現れる。

最後に消費の生産である。それは连接的総合とも言い換えられる。消費の生産は、「だから、それは私である。だから、それは私のものである……」という仕方主体が強度から生れ、その強度を消費する総合である。その主体の消費においては、切断は切断－残余あるいは残りものとして現れる。

このように欲望する生産は、生産の生産から登録の生産を経て消費の生産へと至る。このことは、エネルギーの観点からも確かめられる。ドゥルーズ＝ガタリによれば、生産のエネルギーは、「リビドー」(libido)である。そのリビドーの一部は、登録のエネルギーとしてのヌーメン(Numen)に変わる。さらにそのヌーメンの一部は、消費のエネルギーとしてのヴォルプタス(Voluptas)に変わる³⁰⁾。

ではこのようなドゥルーズ＝ガタリの欲望する生産から、子どもはどのように捉えられるのだろうか。この論文の冒頭において述べたように、ドゥルーズ＝ガタリは、精神分析を鋭く批判している。そこでドゥルーズ＝ガタリが批判する精神分析から捉えられる子どもの在り方と、ドゥルーズ＝ガタリが提唱する欲望する生産から捉えられる子どもの在り方を比較することによって、欲望する生産から捉えられる子どもの在り方を浮き彫りにしてみよう。

最初に精神分析の視点から捉えられる子どもの在り方について考察してみよう。精神分析とは何であるのだろうか。精神分析家の診療室では何が行なわれているのだろうか。精神分析というものをイメージするために、クライン(M. Klein 1882-1960)の言葉を引用してみよう。

「ディックが私の所へ初めてやって来た時、前にも述べたように、彼は、乳母が彼を私の方へ受け渡しても何ら感情的な反応を示さなかった。前もって準備していた玩具を彼に見せた時も、彼は少しも興味を示さずにそれをみただけであった。私は大きな汽車を取り上げ、小さい方のそばに置き、それらを‘おとうさんの汽車’と‘ディックの汽車’と名づけた。すると、彼は私が‘ディックの汽車’と呼んだ汽車を手に取り、窓の所まで転がして‘駅’といった。私はこう説明した。『駅はお母さんなの。ディックはお母さんの中へ入っていくの』。彼は汽車のものを離れて、室の外と内のドアの間の空間へ駆けて行って、自分をそこに閉じ込め、‘暗い’といって、また再びまっすぐ駆け出してきた。彼は何度もこの動作を行なった。私は彼に説明した。『お母さんの中は暗いのね。ディックは暗いお母さんの中に居るのね』。その間、彼は再

び汽車を手を取ったが、またすぐにドアの間の空間にかけ戻った。」³⁹⁾

このように精神分析家は、その診療室の中で、患者である子どもをその子どもの父と母に関係づける。子どもは、それを望むと望まないと、常にパパ、ママと言うことを強制され、パパ、ママと遊ぶことを強いられる。こうしてドゥルーズ＝ガタリも言うように、精神分析家は、その診療室の中で、父、母、子どもを頂点とした三角形、つまり父－母－子どもという三角形を形成するのである。父と母と子どもという三人の人物は、はっきりと区別されることになる⁴⁰⁾。

またドゥルーズ＝ガタリによれば、子どもが母と近親相姦することと、父の地位を占めることが禁止される。というのも子どもが、母と近親相姦をし、父の地位を占めれば、父－母－子どもの三角形はつぶれ、点になり、父と母と子どもは一体化し、未分化状態に陥ってしまうからである⁴¹⁾。

さらにドゥルーズ＝ガタリによれば、次のような推論がなされる。母との近親相姦と父の地位を占めることは、禁止されているから、そのことは欲望されていたのだ、という推論がなされる。このように推論されることによって、母と近親相姦し、父の地位を占めることに対する欲望、すなわちオイディプス・コンプレックスが定立されることになる⁴²⁾。

したがって精神分析が行っていることは、父－母－子どもというオイディプス三角形を構成し、そこにオイディプス・コンプレックスを定立することである。そして「精神分析は、オイディプス三角形という基盤から自身の問題を提起し、自身の解釈を発展させ続けているのである」⁴³⁾。

このような精神分析から捉えられる子どもの在り方は、どのようになるだろうか。精神分析においては、子どもは、自身の父と母のみに関わる。子どもは、父と母のみを消費し、他の何ものにも関わらないのだ。しかもその父と母は、区別された全体的な人物として存在している。このような全体的な人物は、乳房などの諸々の部分対象を統一化し、全体化している。精神分析は、永遠に子どもを全体的な人物としての父と母に結びつけるのだ。

しかも子ども自身も、一個の全体的な人物、すなわち口、胃、腸、肛門といった諸々の部分対象を統一化し、全体化する全体的な人物である。諸々の部分対象は、そのままの形で、ばらばらの状態では存在し得ず、常に人物の中に回収されることになる。

以上のことから、精神分析から捉えられる子どもの在り方は、次のようになる。精神分析においては、子どもは、一人の全体的な人物として、やはり全体的な人物としての父と母だけに家庭的に関わる存在である。

では次に、ドゥルーズ＝ガタリの欲望する生産の視点から捉えられる子どもの在り方について考察してみよう。ドゥルーズ＝ガタリは、欲望する生産の視点から次のように述べている。「子どもは、最も幼い頃からすでに、欲望する生命の全体をもっている。つまり子どもは、欲望の諸対象や諸機械との家庭的でない諸関係の全体をもっている」⁴⁴⁾。すなわち子どもは、生れたときからすぐに、さまざまな欲望する諸機械の真っ只中にあり、それらの諸機械と関係をもっているのである。ドゥルーズ＝ガタリは次のようにも述べる。「誕生からすでに、揺りかご、母の乳房、おしゃぶり、排泄物は、子どもの身体の諸部分と接続している欲望する諸機械である」⁴⁵⁾。揺りかご、母の乳房、おしゃぶり、排泄物ばかりではなく、おもちゃの汽車や自動車

もまた、欲望する諸機械であり、子どもの身体の諸部分と接続している。子どもは、ありとあらゆる小さな欲望する諸機械に取り巻かれて生きているのである。

したがって欲望する生産においては、父という人物も母という人物も存在してはいない。子どもにとっては、父も母も、ばらばらに分解され、欲望する諸機械として存在している。子どもは、父や母といった全体的な人物に関わるのではない。そうではなくて子どもは、父や母がばらばらになった欲望する諸機械に関わるのである。子どもは、母という人物ではなくて、母の乳房に接続するのだ。

さらに子ども自身もまた、欲望する諸機械である。子どもは、一人の全体的な人物として存在しているのではない。そうではなくて子どもは、口、胃、腸、肛門といった身体の諸部分に分解されている。そしてそのような身体の諸部分が、欲望する諸機械なのである。また欲望する生産においては、身体の諸部分である欲望する諸機械が、一人の全体的な人物の中に回収され、取り込まれてしまうということはない。欲望する諸機械は、それ自体として存在し、それらを統一化したり、全体化したりする全体とは関わらないのだ。子どもは、欲望する諸機械として生きていて、その欲望する諸機械は、どこまでもばらばらな諸部分として存在している。

以上のことをまとめれば、ドゥルーズ＝ガタリの欲望する生産から捉えられる子どもの在り方は、次のようになる。欲望する生産においては、子どもは、口、胃、腸、肛門といった欲望する諸機械に分解されていて、それらの諸機械は相互に接続している。たとえば口と胃は接続している。さらに身体の諸部分としての欲望する諸機械の周りには、揺りかご、母の乳房、おしゃぶり、排泄物、おもちゃの汽車や自動車といった欲望する諸機械が存在していて、身体の諸部分としての欲望する諸機械に接続している。たとえば母の乳房と口は接続している。そしてこれらの欲望する諸機械は、統一化されたり、全体化されたりすることがなく、ばらばらで多様に散乱している。子どもという全体的な人物は存在せず、ただ自由で多様な欲望する諸機械の接続が存在するだけである。ゴツゴツした小さな諸機械が、際限なく接続と連結を繰り返すという異様に奇怪な在り方が存在しているのだ。このように欲望する生産において、子どもは、ばらばらの欲望する諸機械として、他のさまざまな欲望する諸機械に取り巻かれ、それらの諸機械に非家庭的に接続する存在である。

欲望する生産は何も、子どもに対する両親の愛情や援助を否定しているわけではない。たしかに子どもにとって、両親の愛情や援助は必要である。しかし子どもは、両親を全体的な人物として体験しているのではなく、ばらばらの欲望する諸機械として体験しているのである。子どもが生きる世界の中には、人物としての両親が存在しているのではなく、欲望する諸機械としての両親が存在しているのだ。また欲望する生産は何も、家庭の存在を否定しているわけではない。たしかに「小さい子どもは、絶えず家庭の中にいる。しかし家庭の中で、始めからすぐに、子どもは、恐るべき非家庭的な経験に直接的に遭遇しているのだ」⁴⁶⁾。子どもは、家庭の中にありながら、欲望する諸機械と非家庭的に接続しているのである。

このように、精神分析から捉えられる子どもの在り方、つまり父や母と関係する子どもの家庭的な在り方と、欲望する生産から捉えられる子どもの在り方、つまりさまざまな欲望する諸機械と関係する子どもの非家庭的な在り方とは、鋭く対立している。しかし両者は、単に子ど

もの異なる二つの在り方というわけではない。ドゥルーズ＝ガタリは、オイディプス三角形としての家庭が欲望する生産を抑圧すると指摘している¹⁷⁾。したがって子どもの家庭的な在り方が、子どもの非家庭的な在り方を抑圧することになる。子どもは何よりもまず、自ら欲望する諸機械として、他のさまざまな欲望する諸機械の中で非家庭的に生きている。しかし子どもが、一つの全体的な人物として、父と母という二つの全体的な人物と家庭的な関係を取り結ぶという在り方が、後から忍び込んでくる。後からやってくる子どもの家庭的な在り方が、すでに前から存在している子どもの非家庭的な在り方を抑圧し、押さえつけてしまうのである。こうして子どもは、望むと望むまいとに拘らず、欲望する諸機械との非家庭的な関係を捨て去り、両親との家庭的な関係の中に入ることを強いられる。子どもの家庭的な在り方が、子どもの非家庭的な在り方にとって代ったのである。

以上から、精神分析の立場から捉えられる子どもの在り方は、父と母という全体的な人物に関わる全体的な人物としての子どもという在り方である。この子どもの在り方は、後からやってくる二次的な子どもの在り方に過ぎない。ドゥルーズ＝ガタリの欲望する生産の立場から捉えられる子どもの在り方は、さまざまな欲望する諸機械の中で生きている欲望する諸機械としての子どもという在り方である。この子どもの在り方は、子どもにとって始めから備わっている基本的で、本来的な在り方なのである。

ここでこの論文はひとまず終わる。この論文では、『アンチ・オイディプス』の前半部で提起された欲望する生産という概念を中心にして考察を進めてきた。『アンチ・オイディプス』の後半部についての考察は、今後の残された課題である。したがってこの論文は、『アンチ・オイディプス』についての基礎的な研究であり、『アンチ・オイディプス』全体の考察の導入をなしているのである。

註

- 1) Gilles Deleuze, Félix Guattari, *L'Anti-Édipe*, Minuit, 1972, p. 117. (『アンチ・オイディプス』, 市倉宏祐訳, 河出書房新社, 1986年, 125頁。)
- 2) *Ibid.*, p. 10. (同書, 16頁。)
- 3) *Ibid.*, p. 11-12. (同書, 17-18頁。)
- 4) *Ibid.*, p. 10. (同書, 16頁。)
- 5) *Ibid.*, p. 10. (同書, 16頁。)
- 6) *Ibid.*, p. 43-44. (同書, 51-52頁。)
- 7) *Ibid.*, p. 34. (同書, 41頁。)
- 8) *Ibid.*, p. 12. (同書, 18頁。)
- 9) *Ibid.*, p. 13-15. (同書, 20-21頁。)
- 10) *Ibid.*, p. 15. (同書, 21-22頁。)
- 11) *Ibid.*, p. 13. (同書, 20頁。)
- 12) *Ibid.*, p. 14. (同書, 20頁。)
- 13) *Ibid.*, p. 50-52. (同書, 57-60頁。)
- 14) *Ibid.*, p. 15-16. (同書, 21-22頁。)
- 15) *Ibid.*, p. 17-18. (同書, 24頁。)
- 16) *Ibid.*, p. 18-19. (同書, 25-26頁。)

- 17) *Ibid.*, p. 90-91. (同書, 97-99頁。)
- 18) *Ibid.*, p. 17-18. (同書, 24頁。)
- 19) *Ibid.*, p. 46-47. (同書, 53-54頁。)
- 20) *Ibid.*, p. 47-48. (同書, 54-56頁。)
- 21) *Ibid.*, p. 46-47. (同書, 53-54頁。)
- 22) *Ibid.*, p. 46. (同書, 53-54頁。)
- 23) *Ibid.*, p. 18-19. (同書, 25-26頁。)
- 24) *Ibid.*, p. 25-27. (同書, 32-34頁。)
- 25) *Ibid.*, p. 23-24. (同書, 30-31頁。)
- 26) *Ibid.*, p. 25. (同書, 32頁。)
- 27) *Ibid.*, p. 22-23. (同書, 29-30頁。)
- 28) ダニエル・パウル・シュレーパー, 『ある神経病者の回想録』, 渡辺哲夫訳, 筑摩書房, 1990年, 73頁。
- 29) Gilles Deleuze, Félix Guattari, *L'Anti-Edipe*, p. 102-103. (『アンチ・オイディプス』, 110頁。)
- 30) *Ibid.*, p. 27. (同書, 34頁。)
- 31) *Ibid.*, p. 23. (同書, 30頁。)
- 32) *Ibid.*, p. 23. (同書, 30頁。)
- 33) ダニエル・パウル・シュレーパー, 『ある神経病者の回想録』, 232頁。
- 34) Gilles Deleuze, Félix Guattari, *L'Anti-Edipe*, p. 23. (『アンチ・オイディプス』, 30頁。)
- 35) *Ibid.*, p. 48-50. (同書, 56-57頁。)
- 36) *Ibid.*, p. 7. (同書, 13頁。)
- 37) *Ibid.*, p. 22-23. (同書, 29-30頁。)
- 38) *Ibid.*, p. 23. (同書, 30頁。)
- 39) メラニー・クライン, 「自我の発達における象徴形成の重要性」, 村田豊久・藤岡宏訳, 『メラニー・クライン著作集・1 子どもの心的発達』, 誠信書房, 1983年, 272-273頁。
- 40) Gilles Deleuze, Félix Guattari, *L'Anti-Edipe*, p. 83-84. (『アンチ・オイディプス』, 90-92頁。)
- 41) *Ibid.*, p. 83-84. (同書, 90-92頁。)
- 42) *Ibid.*, p. 83-84. (同書, 90-92頁。)
- 43) *Ibid.*, p. 20. (同書, 27頁。)
- 44) *Ibid.*, p. 56. (同書, 64頁。)
- 45) *Ibid.*, p. 55. (同書, 63頁。)
- 46) *Ibid.*, p. 55. (同書, 63頁。)
- 47) *Ibid.*, p. 134-145. (同書, 143-153頁。) 家庭と資本主義社会とは、深く結びついているが、この論文では、資本主義社会については論じないことにする。

(博士後期課程2回生, 臨床教育学講座)